

グリム兄弟の „Kinder- und Hausmärchen”

における援助者について — 3 —

今 田 淳

グリム兄弟が編纂した „Kinder- und Hausmärchen” に収められた206の話の中で、民話における援助者とよぶのに相応しい援助者が登場する話は34であり、その援助者を分類すると『小びと又は一寸ぼうし』(七話)、『老婆又は神通力をもつ女』(七話)、『恩をうけた動物』(五話)、『魔法にかけられている人物』(七話)、その他『単独の例で分類しがたいもの』(八話)である。そのうちの『小びと又は一寸ぼうし』、『老婆又は神通力をもつ女』、『恩をうけた動物』が援助者として登場する19の話については既に検討をすませたので、ここでは残りの15の話についての検討をして、最後に援助者についてのまとめをしておきたいと思う。

先ず、『魔法にかけられている人物』が援助者になっている七つの話についてみると、主人公は57番、63番の話が三人兄弟の末の王子、96番の話が兄二人をもつ王女、106番の話が三人の奉公人のうち最年少の奉公人、127番が王女、136番が王子、193番が太鼓たたきである。96番の話の王女は、主人公としては三人兄弟の末の弟と同じような行動をする。57. Der goldene Vogel(黄金の鳥)。王子さまが、王さまの庭の「黄金のりんご」がなる木の番をすることになるが、兄二人は真夜中になると眠りこんでしまって失敗する。王さまにあまり信用されていない『末の王子』(der jüngste Königsson) は眠りこまないで、「黄金のりんご」をとりにきた「黄金の鳥」に矢を射かけ、その羽根を一枚手に入れる。王さまは「黄金の鳥」そのものを欲しがり、王子たちが順に旅立つことになる。長兄は途中で『狐』(ein Fuchs)に出会い、「わたくしを射ってはいけません。うたなければ、いいことを教えてあげます。あなたは黄金の鳥をさがしにいらっしゃるのですが、今晚ある村につきます、その村には、宿屋が二軒むかいあっています。一軒は、あかりがかんかんついていて、うちのなかは賑かですが、そのうちへ泊ってはいけません、見かけは下等でも、もう一軒のほうへおはいんなさい」といわれるが、いうことをきかないで「なあんだ、こんなわからずやのけだものにうまいことなんかおしえられて、おたまり小法師があるもんか」と考えて、『狐』に鉄砲をうつがあたらない。二軒の宿屋のところになると「にぎやかなほうへはいっ

て、飲めや歌えで日を送るうちに、鳥のことも、おとうさまのことも、それからまた、ためになる教訓も一つのこらず忘れてしまう。次兄も、「狐がでくわして、いい智慧をかしてくれたのですが、次男は狐の言うことを耳にとめませんでした」でやはり長兄と同じことになる。末の弟は命乞いをする『狐』に、「きつねくん、安心したまえ。きみなんぞ、どうもしやしないよ」といって鉄砲もうたない。『狐』の指示した宿で一夜を過ごす、翌日また『狐』が現れて、「これからさきあなたのしなければならぬことを言ってあげます。どこまでもまっすぐに行くのですよ、どんづまりに、あるお城のそこへです。お城の前には、兵隊が多数ごろごろしていますがね、みんな、ぐうぐう、いびきをかいてねているのですから、気にすることはありません、まんなかを通りぬけて、まっすぐにお城のなかへおはいんなさい。それから、おへやというおへやを一つのこらず通りぬけると、いちばんおしまいに、いやでも、黄金の鳥が木のかごにはいってぶらさがってるおへやへはいます、その籠とならんで、からっぽの黄金のかごがござってありますが、あなた、かんじんの鳥を、その鳥のはいってる粗末なかごからだして、金ぴかのほうへ入れかえないようにね、いいですか、そんなことすると、あなた、とんだめにあうかも知れませんか」と、「黄金の鳥」をどうやって手に入れるか教えてくれる。しかし『狐』の忠告を忘れて、「このきれいな鳥をこんな下等なみっともないかごに入れておくなんて、おかしい話だ、と考えて、かごの口をあけると、鳥を驚づかみにして、黄金のほうへ入れかえ」て、鳥の声で目をさました兵隊に王子はつかまって、「風よりも速く走る黄金の馬を王さまのところへつれてきたら、王子の命はゆるしたうえ、そのお礼に黄金の鳥もやろう」ということになる。再び『狐』が現れて援助するが、王子は同じあやまちをおかして、「黄金城の王さまの美しいおひめさまをつれてこられれば、命はたすけてやろうし、黄金の馬も、熨斗をつけてあげる」といわれる。あきれ『狐』をしりめに主人公はここでも同じ失敗をくりかえすが、「きさまの生命はないものじゃ。じゃがな、わしの窓の前に山がわだかまりおって、遠くの見はらしがきかぬ。きさまが、この山をとりぬけるとあれば、恩赦の途もあろう。したが、それもこの八日以内にやるとのねばならぬことじゃ。このことが首尾ようまいならば、わしの娘は、褒美として、きさまにつかわすぞ」というとんでもない難題も『狐』が解決してくれる。更に王子は『狐』の知恵で、「黄金城の姫」も「黄金の馬」も「黄金の鳥」も渡さないで、故郷へつれて帰ることになる。「さあ、こんどはわたくしに、あなたにお手つだいしたお礼をください」、「わたくしたちがあすこの森へはいたら、わたくしを射殺して、わたくしの首と四肢をちょんぎってください」と『狐』に頼

まれるが、「いや、これはまた、とんでもない恩がえしだぞ、そんなこと、とてもできるわけのものではない」と、果たしえない主人公に『狐』は更に忠告して別れを告げる、「絞首架くびりだいの肉を買ってははいけませんよ、それから、井戸のふちに腰をかけてはいけませんよ」。その忠告も忘れて絞首架から兄二人を買いとって助け、森の中でうっかり井戸のふちに腰をかける。兄二人は「弟を仰向けに井戸の中へほうりこんで、おひめさまと、馬と、それから鳥をうばいとして、お故郷のお父さまのところへかえる」が、主人公はまたまた『狐』に助けられ、最後には「極悪無道のお兄さんたちは、つかまえられて、処刑おしおきになり」、主人公は「黄金城のお姫さま」と結婚して王さまの後継者になる。その後森で会った『狐』に、「どうぞわたくしを射ち殺して、あたまと四つあしをちょんぎってくださいませんか」と再度頼まれて、願いどおりにしてやると『狐』は人間の姿にもどり、実はそれがお姫さまの兄で魔法から解放されたということになる。魔法をかけられた人物が、自分を救い出すことになる主人公を援助するという形式だが、主人公が何度も何度も忠告を守りえないで自らを窮地に陥れ、より困難な課題を背負いこむという筋立て、助けてくれた援助者を殺すことがその援助者を救うことになるという一種の悪魔払的な要素など、非常に珍しい構成の物語である。106. Der arme Müllerbursch und das Kätzchen (かわいそうな粉ひきの若いものと小猫)。「おまえがた、旅にでなさい。それでな、そのみやげにいちばんいい馬をもってきたものに、この粉ひき所をあげる」といわれた粉ひきの若いものが三人旅に出るが、兄弟子二人は洞穴ほらあなで眠りこんだ『わからずやのハンス』(der alberne Hans)をおいてさっさとどこかへ行ってしまう。独りきりになったハンスは森の中で『小さな三毛猫』(ein kleines buntes Kätzchen)に出会い、「おじさんは、いい馬が一头ほしいのね。あたしについてらっしゃい、そうして、あたしのめしつかいになって、七年だけ、かげ日なたなく働きなさい、そうしたら、馬を一头あげることよ、おじさんが、生まれてから一度も見たことのないような、りっぱなのをね」といわれてそこで七年間働く。「うちへおかえり！ 馬は、つけてあげない。三日たったら、あたしが自分でおまえのそこへとどけてあげるよ」といわれるまま家に帰る。兄弟子の二人が連れて帰っていた馬は盲と跛。馬鹿にされながら三日経つと、きらびやかな王女がハンスのもらう馬を連れてきて、本来ならハンスが粉ひき所の持ち主になるのだが、王女がハンスを連れていき、二人は結婚する。この王女というのが実は例の『小さな三毛猫』だったというのである。魔法にかけられていたという記述は全然ないけれど、主人公がそのもとで七年間働らき、「あすこに、銀の材木があります、それから手斧でも、さしがねでも、いりょうのものはなんで

もみんな銀でそろってるから、あれで、まず小さな家を一軒たてとくれ」といわれて、その家を建てることで魔法がとけたと思われるのである。その小さな家も、「ふたりは、いちばんききに、ハンスが銀の道具をつかって建てた小さな家のほうへ馬車をはしらせました。行ってみると、その家は大きな御殿で、なかにある物は、なにもかも銀と黄金ばかりです」ということになり、二人は生涯そこで暮らすことになる。主人公が最初に与えられた課題を解決するための援助をこえてしまっているけれど、『小さな三毛猫』が援助者であること、またその援助者自身も救われている、という形式はかわらない。96. De drei Vügelkens (三羽の小鳥)。悪い叔母に生まれるとすぐ川に捨てられた二人の王子とその妹の王女が、漁夫に拾われて成長する。父を探しに旅に出た一番上の兄は、大きな川の岸で魚をとっている『おばあさん』(‘ne ole Fru)に出会い、「おばあさんがおさかなを一ぴきつかまえるまでには、ずいぶんながいことかかるのでしょね」という素っ気ない態度で接して、川は渡してもらえるがそれ以上のことは何もしてもらえない。兄を探しに出かけた二番目の王子も同じことになる。二人の兄を探しに出た『王女』(de Dochter)は、「おさかながうまくとれるといいわねえ」と優しいので、『おばあさん』は王女をおぶって川を渡ったうえに、「木の枝の筥」を一本わたして、「おまえはいい子だ、この路をどこまでも行くのだよ。大きな黒犬のそばをとおりかかることがあるがね、口をきかず、きもったまをすえて、笑ったり、犬をのぞいたりしないで通りすぎなくてはいけない。そのつぎには、あけはなしになってる大きな御殿のとこへでるから、しきいの上にこの筥をおとして、ずうっと御殿のなかを通りぬけて向うがわから外へ出るのだよ。出たところに古井戸があって、そのなかから大きな木が一本はえている、その木に鳥がかがけてあって、鳥が一羽はいつてる、それをとりはずして、それから、こんどはその井戸の水をコップに一ぱい汲んで、この二つをもって、せんとおんなじみちをもどってくるのだよ。しきいのとこへ来たら、おとしておいた筥をひろってね、またさっきの犬のわきをとおるときに、犬の顔をぶつのだが、見当がはずれないようにおしよ。それがすんだら、さっさとあたしのところへかえっておいで」という。『おばあさん』のいったとおりにすると兄二人にも会えたうえに、魔法にかけられて黒犬になっていた「どこかの王子」も救うことができる。最後には、『おばあさん』にいわれて持って帰っていた「小鳥」のうたで叔母たちの悪事が明らかになり、「犬の子」、「猫の子」を産んだとして牢屋にいれられ、「病みほうけて、みるかげもなくなっていました」という母(お妃)も、やはり持って帰っていた「井戸の水」で元気になって、主人公の王女は救いだした王子と結ばれるのである。援助者とし

ての『おばあさん』は、「川の岸には、いまだにおなじみのおばあさんが立っていて、みんながとどこおりなくもどってきたのを見て、たいへん喜びました。そして、みんなをおぶって川をわたしてしまうと、どこかへ行ってしまいました。おばあさんも、これで魔法がとけたのです」で消えてしまう。魔法にかかっている間は川で渡しの役を続けなければならないということ以外、元々がどんな人物だったのか、魔法がとけたあとどうなったのかなど不明なところがあって、不完全な物語なのかもしれないが、『老婆、神通力をもつ女』とは異質の人物で、援助そのものも単なる援助ではなく、自らも救われるための援助である。127. Der Eisenofen (鉄のストーブ)。森の中で道に迷った『王女』(eine Königstochter)が、魔法の呪いで「鉄のストーブ」に閉じ込められている王子に道を教えてもらい、かわりに王子を「鉄のストーブ」から救い出して二人は結婚することになるのだが、「お父さまと三語みことよりもよけいに口をきいてはいけない、三語だけしゃべったら、かえってこなくてはいけない」といわれて父のもとに帰った王女が、三語以上しゃべってしまい、そのとたん王子と「鉄のストーブ」は森から消えてしまう。王女は森の中で王子を探しているうちに「ちいっぽけな古い家うち」につく。そこには「ぼてぼてふとったひきがえると小さなひきがえるばかり」がいる。泊めてもらって身の上話をすると、翌朝出かけに『ばあさん墓』(die alte Itsche)が、「大きな針三本」、「車犂の車の輪一つ」、「胡桃三つ」を与える。「針」と「車の輪」の助けで王子のいる城につき、「胡桃」の中にあつた美しい衣裳の力をかりて王子に自分のことを思い出させ(113、186番の話と同じモチーフ)、二人でその城を逃げ出す。ひきがえるのいた小さな家にたどりついて、その中へ入ってみると、「その小舎は大きな御殿でした。ひきがえるどもは、一びき残らず、しばられていた魔法からすくいだされ、それが、みんな王さまのお子さまばかりで、よろこんだのなんの、おはなしになりません。そこで御婚礼があつて、ふたりはこの御殿に足をとめました」。『ばあさん墓』の贈つた三つの品物が、王子を探し出し、王子と結ばれる助けになっているのだが、王女と王子が結ばれることになつてもどつてくると、ひきがえるたちも魔法から解放されるのである。193. Der Trommler (たいこたたき)では、「魔ほうつかいの女の妖術におちいって、今はガラス山の上に封じこめられている」、「日の出の勢のある国王の娘」(die Tochter eines mächtigen Königs)を救い出しにいくことになつた『齢のいかない太鼓たたき』(ein junger Trommler)が、「願かけのかなう馬の鞍」を手に入れてガラス山について、なお「この指ぬきで、外の池のかえぼりをするのだよ、それも、夜にならないうちにすっかりしてしまつて、それから、水の中にいる魚を、一びきのこらず種類わけにし

て、ちゃんと大ききの順にならべとかなくちゃいけないのだよ」、「この森じゅうの木を一本のこらず伐りたおして、それを薪に割って、上下四方六尺の山に積むのだよ、それも、晩にはちゃんとかたづいてなきや、だめだよ」、「この薪をのこらずひとやまにして、火をつけて燃しちまうんだよ」と、三つの難題を与えられる。そこにいた一人のむすめ、魔法で閉じ込められている『王女』、が、「願かけのかなう指輪」を使ってかわりにすべて片付け、自らも救われる。113、127、186番の話と同じように、主人公が『王女』を忘れてしまうのだが、『王女』は「指輪」を使って美しい衣裳をとりだし、三晩目には太鼓たたきの目が醒めていて、二人はめでたく結ばれるのである。話の前半部で『王女』が主人公の太鼓たたきを援助するのは、それによって自分自身が魔法から解放されるためである。後半の話は、「願かけのかなう指輪」を使って衣裳を出すところが多少異色だが、113、127、186番の話と同工にして異曲のものである。136. Der Eisenhans (鉄のハンス)。ある王さまが所有している森の沼に、魔法にかけられた山男『鉄のハンス』(der Eisenhans)がいたが、かりゅうどに捕えられ、「鉄のかご」に入れられて王さまの城の広庭におかれる。八才になる『王子』(ein Königssohn)のマリがそのかごの中におちて、王子はマリとひきかえに「鉄のかご」の鍵をあけてやる。『鉄のハンス』は王子を連れて森へ帰る。そこで王子は幸福になれるはずだったが、『鉄のハンス』が与える仕事を完全にはなしえず、結局『鉄のハンス』のもとを去らなければならなくなる：「おまえは試験に及第しない、これ以上もうここにいるわけにはいかん。世間へでなさい、世のなかに出たら貧乏の味がわかるだろう。だがな、おまえは悪気がなく、わたしはもともとおまえをかわいく思っているのだから、おまえに一つさせてあげることがある。いいかね、おまえが二進も三進もいかない目にあつたら、森へ行つて、『鉄のハンス』と呼んでごらん、そうしたら、わたしが出てきて、おまえに力をかけてやる」。大きな都のお城で働いているうちに戦争になるが、王子は『鉄のハンス』の援助で大活躍し、三日間の祝宴で毎日お姫さまがなげた「黄金の林檎」を三つとも手に入れ、そのお姫さまと結ばれ、『鉄のハンス』も呪われていた魔法から解放される。王子が解決するのは命にかかわるような課題ではないし、どうすれば『鉄のハンス』の魔法がとけるのかも明らかにされていないが、「黄金の林檎」を三つとも手に入れることが王女との結婚へとつながっているのであり、その際に『鉄のハンス』は王子を援助しているのである、「おまえに紅い具足もやるし、りっぱな栗毛の馬にも乗せてやるぞ」、「二日めには、鉄のハンスは、青年を白装束のおさむらいにしたてて、白馬をやりました」、「三日めには、青年は鉄のハンスから黒しょうぞくと黒馬とをも

らってきて、またもや、りんごをとりました。「黄金の林檎」を手に入れるための援助について具体的には何も述べてないが、「王さまのおひめさまの黄金のりんごを、ぼくが取りたいんだ」という王子の頼みに、『鉄のハンス』が「そのりんごなら、おまえがもう手にいれてるも同様だわい」とこたえて、それに続くのが上記引用の部分であるから、援助があったことは確かである。また、二人の婚礼にさいして「一人の王さまが、^{いきおい}威勢あたりをはらうばかり」に現れて、「わしは、鉄のハンスじゃ、魔にのろわれて山男のすがたにされておったが、おまえは、みごとにおしを救いだしてくれた」というところから判断すると、二人の結婚が『鉄のハンス』を魔法から解放することにつながっているようだが、『魔法にかけられている人物』である『鉄のハンス』が、援助者であるという事実は動かない。63. Die drei Federn (三枚の鳥のはね) では、王さまが自分のあとを継ぐ者を決めかねて、三人の王子に「旅にでなさい。だれでもいちばん上等の絨毯をもってきてくれるものが、わしのなくなったあとで王になるのじゃ」、「わしのところへいちばんりっぱな指輪をもってまいる者が国をうけつぐこととする」、「いちばん美しいおよめさんをつれかえる者に国をやる」と、順々に課題を出す。「鳥の^{はね}羽毛を三枚、空へ吹きとばして」、そのはねが飛んでいく方に出かけることになるが、『抜作』(der Dummling)といわれている『末の弟』が従うべきはねは、「まっすぐに飛びあがったばかりで遠くへはとんで行かず、まもなく地面へ」おちてしまう。一番不利であった、課題を解決することなど不可能と思われた末の弟の『抜作』が、『大きな、でぶでぶふとったひきがえる』(eine große dicke Itsche)の援助でいつも一番になり、「王さまの冠をさずかり、(こまかいことは兎も角、神さまの目でごらんになれば)、聖人の道にそむかず、ながいあいだりっぱに国を治めるのである。三つ目の課題のときに、「抜作は、^{わなり}環状にあつまっているうちから、手あたりしだいに一びきつまみだして、それを、黄いろい乗物のなかへおきました。すると、そのひきがえるが蕪の中へはいったとたんに、ひきがえるは、目のさめるような美しいお姫さまになりました」となっていて、それ以外には何らの言及もないので、これは魔法で変身させられていたものなのか、あるいは「ひきがえる」の化身なのかは定かでないが、化身とか妖精が主人公と結婚してながいあいだ一緒に暮らし、そのまま話が終るといえるのはいかにも不完全かつ不自然であろうし、他にそのような結婚の例もないので、魔法で変身させられていたのではないかと判断してみた。ここに分類したものは、どうしたら魔法から解放されるのか明らかで、従って主人公が解決すべき課題も、『援助者』を魔法から解放することと密接につながっているものと、主人公が解決すべき課題は元来主人公自身の

幸福と結びついているのだが、主人公が幸福になることで『援助者』の方も救われる、というものと二つの形式がある。

残りの八つの話、14、21、29、88、126、134、166、188番、に登場する『援助者』には論ずべき共通点はない。126. Ferenand getrü und Ferenand ungetrü (実意ありフェレンランドと実意なしフェレンランド)と188. Spindel, Weberschiffchen und Nadel (つむと梭とぬいばり)の二つの話では、共に『名づけ親』が登場して、その贈物が主人公を助けるというものだが、126番の話に登場する『名づけ親』(Gevaher)は、「貧乏くさい男」の姿をしているがどうも「神さま」みたいであり、その贈物は『白馬』と動物であるのに対して、188番の話に登場する『名づけ親』(die Pate)は、自身病気になるって死んでいく「おばあさん」であるから全く異質の存在だといえるし、贈物も『紡錘』、『梭』、『ぬい針』と品物である。14. Die drei Spinnerinnen (糸くり三人おんな)では、糸をくることを体現したような『三人の女』(drei Weiber)が『援助者』になっていて、話の筋は55番の Rumpelstilzchen (がたがたの竹馬こぞう)によく似ている。この『三人の女』は多分「神通力」をもっている女だと思うが、どこにもそれを裏付けるような記述がないことと、援助を終えたあとで再び登場するというのが、『老婆』、『神通力をもつ女』とあまりにも異質なので、そのグループに加えきれなかったのである。29. Der Teufel mit den drei goldenen Haaren (黄金の毛が三ほんはえてる鬼)では、『鬼のお祖母さん』(die Ellermutter)が『援助者』になっていて、165番の Der Vogel Greif (怪鳥グライフ)の話の後半部とよく似た話である。166. Der starke Hans (強力ハンス)では、『大気 of 精』(Luftgeister)が登場し、物語としては91番の Dat Erdmänneken (地もぐり一寸ぼうし)と似ているが、主人公ハンスがお姫さまを救い出すのは、誰かに与えられた課題としてではなく、自ら背負いこんだ課題としてである。『大気 of 精』は指輪の所有者の家来というべき存在であり、その意味では純粋な『援助者』とはいえないかと思うが、課題を解決することが二人の結婚へとつながっていく話の筋は、『援助者』を登場させるのに相応しいし、その課題解決に力をかしているということで『援助者』の方に分類してみたのである。21. Aschenputtel (灰かぶり)では『まっ白な小鳥』(ein weißes Vöglein)が、88. Das singende springende Löweneckerchen (なきながらびょんぴょん跳ぶひばり)では、『お日さま』(die Sonne)と『お月さま』(der Mond)と『北風』(der Nachtwind)が、134. Die sechs Diener (六人のけらい)では異能の『六人の男』(die sechs Männer)が『援助者』になっている。21、126、134番の三つの話について援助の実態を検討してみようと思う。21. Aschenputtel (灰かぶり)。継母と

その二人の娘にいじめられている『ママ娘』(das arme Stiefkind)が、大きな市いちに出かける父に、「おとうさん、おとうさんのおかえりみちで、いちばんさきにお帽子へぶつかった木の小枝を折って、それをあたくしのおみやげにしてね」と頼み、「はしばみの小枝」をもらう。その小枝を母の墓にさして泣いていると、涙が枝の上におちて、その小枝が「りっぱな木」になる。「毎日三度ずつその木の下へ行って、泣いておいのりを」していると、『まっ白な小鳥』(ein weißes Vöglein)がやってきて、望みのものを何でも投げおとしてくれる。王さまが催す三日間の饗宴に、嫁入り前のうつくしい女は一人のこらず招かれることになり、ママ娘もいきたがる。「かあさんは、ひら豆を大皿に一ぱい、灰のなかへぶちまけてあるのさ。おまえがね、あのひら豆を二時間でもとどおりにひろいだしたら、いっしょに行かせてあげる」という継母のいじわるも、ママ娘が「家ばとちゃん、山ばとちゃん、青空の下の小鳥ちゃん、みんな来て、あたしのひろうの、手つだってちょうだいなあ！

いいのは、お鍋へ、

わるいのは、みんなの餌ぶくろへ」

と頼むと、家鳩や山鳩、他の小鳥たちが助けてくれる。最後には、

「はしばみちゃん、ぐらぐらうごいて、ゆさゆさうごいて、

こがね、しろがね、あたしにおとしてちょうだいな」

という呼びかけに、「いつもの鳥が、黄金こがねと白銀しろがねの糸で織ったきものと、それから、絹糸としろがねの糸でべたいちめんぬいとりに刺繡のしてあるおぎしきぐつとを投げおとして」くれる。ママ娘が美しいきものをきて「ごちそうのお席」へいくと、王子さまはママ娘とだけ踊ることになる。日が暮れると王子からすりぬけて誰にも見付からずに家に帰り、相変らずの『灰かぶり』(Aschenputtel)になるのだが、三日目には王子が階段一面にぬらせていた「チャン」に靴をとられてしまう。「ぼくがつれあいにしようとおもうのは、この黄金のくつがぴったり足にあう女にかざる」ということになり、先ず継母の娘二人が「つまさき」を切りおしたり、「かかとのほじっこ」を切りとって、無理矢理合わせるが、

「ちょいと、うしろを見てごらん、ちょいと、うしろを見てごらん、

血が、くつにたまってる、

くつが、ちいさすぎるのさ、

ほんとの嫁御は、まだうちにいる」

と、二羽の家鳩が「はしばみの木」から王子に教える。『灰かぶり』には靴もぴったり合うし、家鳩も

「ちょいと、うしろを見てごらん、ちょいと、うしろを見てごらん、
血なんぞ、くつにたまってない、
くつは、ちいさすぎやしないもの、
ほんとの嫁御、ほんとのよめごをつれていく」

といって、「はしばみの木」から飛びおりてきて、『灰かぶり』の両肩にとまる。

『灰かぶり』は王子さまのお嫁さんになり、二人の娘は二羽の鳩に両の目をくりぬかれるのである。主人公は『まっ白な小鳥』や「家鳩」に何らかの好意を示したわけではない。マックス・リュティがいう「援助してくれる動物は、なんら明白な理由などないのにわりこんでくることさえある」という動物の例であろうか。

『まっ白な小鳥』をはじめ、「家鳩」、「山鳩」たちが、心根が優しく信心深い『灰かぶり』を助けて、王子さまのお嫁さんにしてやるのであるが、『まっ白な小鳥』は、「おまえ、いい子だからね、いつまでも神さまをだいじにして、それから、気だてをよくしているのですよ。そうするとね、神さまは、いつなんどきでも、おまえを助けてくださるし、かあさんも、天国からおまえを見おろしていて、おまえのためをおもってあげることよ」といって世を去ったという、『灰かぶり』の母の化身ということになるのであろうか。126. Ferenand getrü und Ferenand ungetrü (実意ありフェレナンドと実意なしフェレナンド)。『なんだか貧乏くさい男』(en armen Mann)が、貧乏人の男の赤んぼうの名づけ親になって、『実意ありフェレナンド』(Ferenand getrü)という名前をつけてやり、産婦に「おまえ、うちへかえったら、これをおとつあんにわたしてな、この子が十四歳になるまでしまっておいてもらってくれ、十四になったら、この子を野原へやるのだよ、野原には、お城がある、そのお城に合うのがこのかぎでな、そのお城のなかにあるものは、この子のものだよ」といって、鍵を一つわたす。十四才になって野原にいったら、「お城」があつて「白馬」が一頭いる。『実意ありフェレナンド』はその馬に乗って旅に出る。途中で、「実意ありフェレナンドや、こいつを持ってきなよ」と呼びかける「驚ペン」をひろい、川の岸で苦しうに喘いでいる「魚」を助けてやる。「魚」は、「もしもあなたが災難におあいでしたら、このよびこを吹いてくださいまし、そうすれば、あたくしがあなたをお助けもうします」といって、フェレナンドに「呼子の笛」を与える。更に旅を続けていて道連れになった男、「実意なしフェレナンド」、と二人である王さまに仕えることになるが、主人公『実意ありフェレナンド』は「実意なしフェレナンド」のさしがねで、王さまから「これこれのところに自分のかわいくおもっている女ものがおる、それを召しつれてまいる役目を、その方にもうしつける、万一首尾よくまいらぬときは、その

ほうの命は亡^ないものと心えろ」と命令される。「白馬」が、「あなた、王さまのところへ行って、あなたのほしいとおっしゃるものを王さまがくださるなら、おきさきさまをおつれもうしますと言ってごらん下さい。それでね、王さまがあなたに、肉をいっぱい積みこんだ船を一そう、それからパンをいっぱい積みこんだ船を一そう、これだけのものをくたされれば、事はうまくまいります。そのわけはね、おそろしく大きな大入道たちが海の上におりましてね、そいつらに、肉をおみやげに持ってかなかろうもんなら、そいつらは、あなたを八つ裂きにしてしまいますし、それからまた、おそろしく大きな鳥がいくつもおります、そいつらときたら、パンをだしてやらなかろうもんなら、あなたの目だまを頭からほじくりだしてしまいます」と教えてくれて、無事お姫さまを連れて帰るが、何故かお姫さまが「書附^{かきつけ}をお城に置いてきてしまった、それがなくては生きていけない」というので、再度出かけなければならなくなる。ここでも「白馬」のいうとおりにしたら万事うまくいって、最後には王さまのお妃になるはずだったお姫さまと一緒にになる。「白馬」は、「フェレンドにむかって、あなた、わたくしがおしえてあげる別の野原へいらして、そこで輪乗を三べんかけてくださいまし、と言いました。フェレンドがそのとおりのことをしてやりましたら、白馬は後あしで立ちあがって、王子のすがたにかわってしまいました」というのであるから、魔法にかけられていたのは確かであり、又その「白馬」が実質的な援助をしているのではあるが、そもそもが「名づけ親」になった『なんだか貧乏くさい男』の贈物だったので、『魔法にかけられている人物』の項にはいれなかったのである。この物語にも不自然、不明な要素が多い。「魚」は、主人公が海におとした「鰐ペン」を持ってきてやるのでその役割を果たしているが、「鰐ペン」の役割がはっきりしない。多分「護符」みたいな役割を負わされているのだろうが、話の中では存在そのものが全く宙に浮いてしまっているものであり、従って「魚」の援助も話の筋と全然つながってこないのである。お姫さまがお城に置いてきたという「書附」に何の意味があるかも不明である。更に、主人公『実意ありフェレンド』に好意を示した「娘」がどうなったのか、「実意なしフェレンド」はどんな罰をうけたのか、「白馬」に変身させられていた「王子」が元の姿にもどったあとどうなったのか、そのあたりが全く不明なのである。この「王子」は実はお姫さまの兄であり、主人公に好意を示した「娘」と結婚するというのが、民話の結びの常なのではないだろうか。134. Die sechs Diener (六人のけらい)。魔法を使う妃の娘で、「お日さまの照らす下にいるむすめのうちのいちばん美しいもの」というお姫さまをお嫁さんにしたいと思った『王子』(ein Königssohn)が、旅の途中で六人

の男に出会う。「おらが、うんと息んばりゃ、おらのからだは、この三千倍も巨^{でか}くなるで」という『でぶちゃん』(der Dicke)、「たった今、世界じゅうにおこつてることを、なんでもきいてるのさ。わしの耳にかかっちゃあ、草の伸びる音だつて脱れっこない」という『耳のいい男』(der Horcher)、「おもいきって手あしをうんと伸ばしや、この三千倍は長くなるわ。世界じゅうのいちばん高い山よりも、おいらのほうがもっと高い」という『せい高のっぼ』(der Lange)、「あたしのこの目で見られるものは、なんでもかでも破裂しちまうのでね、この目かくしはとれないのさ」という『爆弾目だまの男』(der Mann mit den scharfen Augen)、「わしのからだは、生まれつき別あつらえでのう、時候が暑いほど、寒くてさむくて、それこそ寒さが骨身にしみわたるし、そうかと思うと、さむけりゃ寒いほど、こんどは暑くてしょうがない。つまり、氷のまんなかに居りゃ、暑くってやりきれない、火のまんなかにいれば、さむくってやりきれないというわけだよ」という『寒がりんぼう』(der Frostige)、「わしは、千里眼というやつでな、森でも野原でも、谷あいでも山でも、どこもかしこも、世界じゅう見とおしだよ」という『千里眼の男』(der Mann mit den hellen Augen)である。「わたしが紅海の底へおとした指輪をとってくる」という最初の課題では、『千里眼の男』が「指輪」がどこにあるかを探しだし、『でぶちゃん』が紅海の水を呑みほして、『せい高のっぼ』がつまみだす。二番目の、「それ、わたしのお城の前の、あすこの草原に、ふとった牡牛が三百頭草をたべてるのが見えるだろ、あれを、おまえが、まるごと、それこそ皮も毛も、骨も角もみんないっしょくたに食べてしまうのだよ、それから、地下室の酒ぐらに葡萄酒が三百樽ある、これを、いま言った食べものにそえて飲みほすのだよ。まかりまちがって、牛の毛が一本でも残ったら、ぶどう酒が—しずくでもあまったら、おまえの命は、わたしがもらうよ」では、『でぶちゃん』が、「自分のからだをひろげて、三百とうの牡牛を、毛一本のこさず、ペろりとたいらげ、もうこれぎりか、朝ごはんにもっと何かないかとたずねましたし、ぶどう酒は、コップもつかわず、樽から直接^{じか}に飲んで、いちばんおしまい^{しま}のしずくは、爪でこそげとって舐めたくらいでした」で解決してしまう。三番目の「娘をおまえの部屋へつれていく、おまえは、じふんの腕で娘をしっかりと抱いているのだよ、だがね、そうやって兩人ひとかたまりになつてるときに、おまえ、ねてしまわないように気をおつけよ、十二時をうったら、わたしが行く、もしもそのとき、娘がおまえに抱かれていなかったら、おまえの負けだよ」では、魔法で眠らされている間に脱けだしたお姫さまがどこにいるかを、『耳のいい男』が「おひめさまはね、ここから、あるいて三百時間ばかりかかるところの岩のなかで、

なさない目にあつたと言うて、なげいてござるわ」ととききだし、『せい高のつぼ』が『爆弾目だまの男』を背負って、「それこそ手のひらをかえす間に、まほうのかかっている岩の前へ来てしまいました。のつぼは、すぐさま伴侶の男の目かくしをはずしてやりました、それで、この男があたりをじろりと見まわしたかとおもうと、岩は、こなみじんに飛びちりました。せい高のつぼは、すかさずお姫さまを抱きあげて、あつというまにつれもどり」、三つの難題はすべて解決される。お姫さまは王子と結ばれるはずなのだが、「じぶんの好きな男を夫にえらぶこともできず、こんな下郎のことをきかなきゃならないなんて、おまえも、ほんとうにとんだ恥さらしだねえ」と耳うちされて、娘が更に難題を一つ出す、「三つの難題はみごとにかたづきましたが、だれか、この材木のまんやかにすわって、火をかけられても平気なものが出てこないうちは、わたくしはあなたのおくさまになりません」。ここでは異常な体質の『寒がりんぼう』がその役割を果たす、「火は燃えだしました。燃えるも燃えるも、三日のあいだもえつづいて、やっと材木が一本のこらずもえきりました。火が消えてみると、さむがりんぼうは、灰のまんやかに棒だちに立って、ぶるぶる、ぶるぶる、白楊やまならしみたようにふるえながら、『こんなめつぼうかいな寒さは、生まれてからはじめてだわい、こいつにもっとつづかれようもんなら、わしゃあ、氷になってしまうところであつたよ』と言いました」。こうして王子は美しい姫と結ばれ、『六人のけらい』は新たな旅へと出ていくのである。最後には、「これで、あなたのお望みもかないました。この上は、あたくしどもはもうおいらよのないからだ。ひとつ、世界をへめぐって運だめしをいたしましょう」と別れていくのに、それぞれが王子に自ら仕えるのも珍しいし、その六人が六人とも主人公を援助するというのも珍しいと思う。人間の能力の大半を誇張した結果が六人の異能ぶりということなのだろうが、それだけに異常体質の男『寒がりんぼう』には別の話をもちこまざるをえなかったのであろうか。夏の暑さ、冬の寒さに対する人間の感情を考えると、最も親しみやすい人物ではあると思うが。何でもかでも一瞬のうちに片付けてしまう万能の『援助者』でなく、異常な能力をもつ複数の『援助者』を登場させているところが、この物語の大きな特色である。

以上が、„Kinder- und Hausmärchen”における援助者の実態であるが、多少結論めいたことも交えながら、援助者と主人公との関係について概観しておきたいと思う。

『小びと』、『一寸ぼうし』が援助者になっている物語では、三人兄弟の末弟を

典型として、父や兄達に軽んじ疎んじられている人物が主人公として援助をうける。『小びと』、『一寸ぼうし』は先ず、援助にあたいする人物であるかどうかを試すかのごとく登場人物に語りかける。兄達は、傲慢で優しさと思慮に欠け、『小びと』、『一寸ぼうし』を無視し、更には馬鹿にして、大抵はその報いをうけて与えられた課題を解決出来ないで、つかめたかもしれない幸運をのがしてしまうのに対して、父や兄達から『愚な者』と馬鹿にされている末弟が、実は思慮深く優しさもあって、正しく『小びと』、『一寸ぼうし』に対応し、その援助をうけて成功するというのが定形のようなものである。『老婆』又は『神通力をもつ女』が援助者になっている話では、主人公は単独で登場するのがほとんどで、その場合援助者たる『老婆』、『神通力をもつ女』は、最初から援助することだけを意図して登場する好意的な人物であつて、素直な対応をしなければその報いに罰を加える『小びと』、『一寸ぼうし』とのあいだには大きな相違がある。初めから援助するつもりで主人公に近づいてくるのであるが、これは援助されるのが単独で登場する主人公である、ということとつながっている。三人兄弟の末弟を援助する『小びと』、『一寸ぼうし』は、兄二人をいわば篩にかけて援助の対象からはずさなければならないのだが、『老婆』又は『神通力をもつ女』の場合、対象からはずさなければならないような脇役は登場しないのである。『恩をうけた動物』が援助者になる場合の主人公は、『小びと』、『一寸ぼうし』型と、『老婆』又は『神通力をもつ女』型との半々になっているが、主人公が最初に助ける『動物』は、後になってその主人公が解決しなければならない課題を計算にいれて選ばれている。主なものを挙げると、「蟻」とか「小鳥」は小さなものを数多く集めるといふ難題のために用意され、「魚」や「鴨」は水の中のものをもってくるといふ課題と結びついており、「狐」はその知恵を駆使して主人公を援助するというのが一般的な形式である。『小びと』、『一寸ぼうし』、『老婆』又は『神通力をもつ女』、『恩をうけた動物』の三者が援助者になっている話が合計19で、援助者が登場する話が34であるからその割合は非常に大きい。『小びと』、『一寸ぼうし』の場合が三人兄弟の末弟、『老婆』又は『神通力をもつ女』の場合が単独で登場する人物、『恩をうけた動物』の場合がその折衷というのは、援助者と援助をうける主人公との関係という意味では面白い現象だと思う。『魔法にかけられている人物』が援助者になっている物語には、全く異質の特徴がある。援助者になっているのは、すべて元来が「王子」又は「王女」であるということである。必然的に主人公は「王子」又は「王女」と結ばれるし、そのせいかどうかは不明だが、援助をうける主人公も、96番の話が兄二人をもつ王女、57、63番の話が三人兄弟の末の王子、127番が王女、136番が王子と、七話

のうちの五話が「王子」又は「王女」といわゆる「王家の人」なのである。変身させられた「王子」あるいは「王女」が、自分を救ってくれる者を援助するというのは、いずれにしても少々歯切れが悪く、民話としては出所が別な一群、即ち王家のどこかで創られたものが庶民のもとへおりてきたのではないと思われるのである。民話の起源は所詮それを明らかにすることは不可能であるが、援助者に誰がなっているかという面から、いわゆる「民衆」から発しているものと、「王侯階級」からのものという程度の分類をすることは可能であろうかと思う。

既に述べてきたように、三人兄弟・姉妹の一番下の弟・妹が主人公として援助をうけるという話が11、二人兄弟の弟というのが2、更に末の弟・妹ではないまでも、異母姉妹あるいは姉や妹にいじめられている主人公の話(21、130番)を加えると、実に半数に近い物語において、いわゆる一番弱い立場にある人物が主人公になっているのであるが、この民話固有の特徴自体に、民話を継承してきた庶民の現世の諸問題に対する現実的な処理のあとがうかがえるのである。即ち、主人公と援助者の出会い、どのようにして援助者が誕生するかという点においてである。三人兄弟の場合を例にとると、兄二人と末弟との間には援助者たる人物への対応の仕方に大きな違いがあるのだが、兄二人が弟と同じ対応をすれば、彼らだって援助者をえることは可能なわけであって、それを二度も失敗させて三度目に成功させるというのは、一面では民話の聴き手たる子供達に、将来彼らが犯してはならない誤ちを強調し、ではどうすればよいかを、最後に成功の例で教えているともいえそうなのである。失敗の例は、一つくらいでは成功に比べて印象がうすくなる、所詮は成功することになっている話でも、失敗との対比で成功の重みが一層増してくる、一方で成功への夢を語りながら、他方で失敗の例を用いて、子供達に人生を歩いていく上での躰をしているといえるのではないかと思う。他面において、一番弱い立場にある人物というのは、それを支配階級に対する民衆という関係におきかえてみればいい。一番弱い立場にあるがゆえに、そこから脱け出して成功を収めたい、そのためにはどうしても援助者、それも超能力を備えた援助者が必要なのである。

最後に、援助者の役割というものを、民話の中心的なでない手である民衆との関連でまとめてみると、およそ次のようなことになると思う。民衆によって語りつがれてきた口承文芸である民話、それが口承の場として有していた主たる場所は家庭であり、その聴き手は主として子供であった。語り手たる民衆、その意味では民話の創造者と呼んでも差支えないであろう民衆は、大抵の場合自分自身の生活に満足することはなかったであろう。しかし満足することは出来なかったに

せよ、彼らは現実の生活に甘んじていなければならなかった。たとえ一部に自らの生活に満足している者がいたにせよ、彼らとて現実と異なった生活を夢みることがあったと思う。そのような民衆が、果たせぬ願いを自分達の口承文芸に託したということは容易に想像出来ることである。しかしいくら文芸とはいえ、何の助けもなしに百姓のせがれが王さまになるなどということありえない。全くの庶民が王女と結ばれて末は王さまになる、それは本来とてもかなわぬ庶民の夢、あるいは夢みることも許されない憧れ、願いであったろう。それを援助者を使って物語の中で実現させてしまうというところに、庶民の現実的な処理の巧みさ、庶民ならではの知恵があったと思われるのである。現実生活においても果たさなくてはならない何らかの仕事、人生を歩む上での諸々のつとめ等々、それらを文芸なるがゆえに奇想天外なものに変えて夢の実現のための課題とし、実際には達成不可能なことを、超能力を備えた援助者を登場させることで可能ならしめ、夢を実現させてしまうのである。その際、援助者が非現実的な存在であればあるほど、許されぬ庶民の願いも非現実な願いであったと思われるし、口承文芸であるからその心配はなかったと思うが、たとえ支配者たる王侯の目にとまることであっても、咎めだてされることもなかったであろう。それに対して、蟻、蜂、鳥、魚など、日常的な動物が援助者として登場すれば、それだけ庶民の願いというものも強かったといえるのではないかと思う。援助者そのものにも庶民の願いが込められていると思うからである。自分達を助けてくれるものがあって欲しい、という願望から援助者は登場したにちがいないし、それが『小びと』とか、『神通力をもつ女』あるいは『大気の精』などであるかぎり、純粹に非日常的で彼岸的な存在であり、援助者そのものに対する庶民の思い入れも、あくまでも存在しないものに対する願望の域にとどまっているはずである。しかし、援助者がひとたび日常我々がよく目にする『蟻』とか『小鳥』となると、主人公の願望は、「こんなにたくさんいる蟻が僕を助けてくれたらいいのになあ」、「私の目の前にいるこの小鳥が私の言葉をわかってくれて、私の願いをきいてくれたらいいのにと」、そのままそれを語り、聴いている庶民の願望でもあるといえるのではないだろうか。ひょっとしたら本当にこれらの動物は、いざという時に自分達を助けてくれるかもしれない、いや是非助けて欲しいという庶民の心が、動物に先ず好意を示し、それに対する報恩として動物が援助者になるという形式の背景にあるのではないかと思う。そう考えると、動物が援助者になっている物語に、庶民の夢と願いが最も純粹に反映されているような気がしてならないのである。